

回 JAZZフェスティバルのボランティアに参加して

私は河口湖JAZZフェスティバルにボランティアとして参加しました。JAZZバンドの演奏やゴスペルの合唱を聞きながら、ホットドックと焼きそばを手分けして盛り付け、隣ではドリンクを販売、観客や演奏者の方々とJAZZや学生生活の話題で会話が弾みました。また、ホールの中では観客に混じって手拍子をし、会場を盛り上げるのにひと役買いました。会場では忙しい時もありましたが、演奏と笑顔が決して絶えない素晴らしい雰囲気でも心も満たされるようでした。

ボランティアの仕事ばかりではなく、河口湖オルゴールの森美術館を訪れる機会を得ました。多くのオルゴールを見て聴いて楽しむとともに、プロのオーボエ演奏にふれて感動を味わい、音楽を身近に感じることができました。

そして最後のBig Wing Jazz Orchestraのアンコール曲Sing Sing Singではボランティアチームを含め、屋外にいた人々もホールに入りました。会場にいるすべての人々が手拍子をすることでJAZZバンドと聴衆とが一体となり、全ての音が溶け合って私をリズムカルで心地良い世界へと誘いました。

私はボランティアに参加し、やりがいだけではなく音楽の素晴らしさをも知ることができ、とても充実した時間を過ごしました。

医学部 吉澤卓也 (東京農業大学第一高等学校出身)



回 1年生国際交流 PSUサマープログラムに参加して

医学部 小林宥大 (開智学園高等部出身)

私は今回のプログラムで充実した夏休みを過ごすことができました。自分にとって初めての経験が多くあり、学ぶことが多かったからです。週末以外は、細かいスケジュールが立ててあり、そのなかには楽しむためのアクティビティだけでなく、病院見学や米国の大学生(自分と同じ学部)との対話などがありました。見学に先立ち、米国の医療制度ならびにそれや彼らが抱えている問題についての授業を受けました。米国の最新の医療技術の見学や、日本とは大きく異なる医療制度は私たちにとって興味深いものでした。

プログラムに参加するときに私たちが気がつけたことは、初めてのことに積極的に挑戦するという事です。ホームステイや病院見学では積極的にすることで、ときには恥をかうこともありました。しかし、その度に少しずつ自分が成長していると感じ、自信が持てるようになりました。

私にとって一番印象深かったのはホームレスシェルターでのボランティアです。正午になるとホームレスの人々が昼食を食べに来るのですが、そこで配膳や清掃のボランティアをしました。50人以上も入れるような食堂の前には大行列ができていて、ホームレス問題の深刻さを知りました。ボランティアは1時間という短い時間でしたが、普段気にも留めないような社会問題を深く考えさせられる、密度の濃い時間でした。

今後はこれらの貴重な体験を教訓として活かし、良き医療人を目指して精進していきたいと思っています。



回 薬学部14回生 同窓会 (H24年7月8日)

36年前にここ赤松寮、白樺寮、ゆり寮(昭和52年入学)で過ごした薬学部14回生の同窓会を富士吉田で行ないました。38名でソメイヨシノの桜の苗木をすみれ寮の前に植樹した際に記念写真を撮影しました。写真の顔ぶれからはかなりの歳月を感じますが、本人達は青春時代に戻った一コマでした。



稲垣昌博

回 富士登山競走救護ボランティア

前期退寮日の翌日である7月27日に開催された富士登山競走に、昭和大学から救護ボランティアとして39名の学生と11名の職員が協力しました。この大会は富士吉田市が主催し毎年実施されているもので、今年65回を迎えた歴史あるものです。レースは標高770mの富士吉田市役所をスタートし吉田口登山道を通って山頂を目指しますが、これまで完走率が50%程度と日本一過酷な山岳レースとして知られています。これまで山岳レースゆえに一般のマラソン大会のような救護体制がとられていませんでしたが、3年前より富士吉田市立病院の前田医師が中心となって救護体制が整えられてきました。本学も医療系大学の特色を活かすべく救護ボランティアとして協力しております。

1年生は26日の退寮後昭岳舎に集合し上級生と合流し、7時からミーティングに参加しました。大会当日学生は5時50分に昭岳舎を出発し、5合目までの配置場所へ移動しました。各配置では国士館大学のスポーツ医科学科の学生やOB・OGと一緒に、救急現場を経験した話など聞き、交流を持ちました。レースでの救護活動は予防に重点を置いたもので、疲れが見られた選手に声かけを行い、その選手のゼッケン番号をつぎの配置場所へ通報するなどの対応を行いました。その結果、重篤な傷病者もなく、最終ランナー通過後配置場所毎に撤収作業を行い、昭岳舎で昼食をとり解散となりました。

登山競走終了後、スタッフの富士吉田市立病院看護師から、「五合目での配置でしたが、昭和の学生さんが朝の挨拶からしっかりとできて、仕事ぶりもてきぱきとしていてスタッフ絶賛でした。」とのコメントもいただきました。

地域交流委員長 堀川浩之



編集後記

昨年度の学事歴変更により後期の終了が年内に早まって二年目、今年も無事に後期定期試験の日程を消化し、年末での完全退寮を迎えることができました。

今回の『白樺・百合』は、後期日程の最初におこなわれる初年次体験実習から初年次最後のイベントとなるクリスマスパーティーまでを記事としています。実習に臨む学生の緊張感や、クリスマスパーティーで各イベントを楽しむ学生の臨場感を少しでも感じ取っていただけるよう編集いたしました。平成25年度以降もより良い編集をしていきたいと考えております。今後とも『白樺・百合』をよろしくお願いたします。

編集委員 高田中成

白樺百合

昭和大学
富士吉田キャンパスだより
第17号 2012.12.21 発行

発行責任者 富士吉田教育部長 小出良平
編集責任者 富士吉田教育部広報委員長 倉田知光
〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 4562
TEL 0555-22-4403



医学部 杉山美沙紀 (沼津東校等学校出身) 撮影

昭和大学の“まごころ”をささえる富士吉田キャンパスでの初年次全寮制教育

富士吉田教育部 寮運営委員長 長谷川真紀子

昭和大学の全寮制教育は、1965年(昭和40年)、毎日富士山の姿を見ることができる富士山の麓、昭和大学富士吉田分校から始まりました。富士吉田寮の第1期生は医学部男子90名でした。現在は医学部、歯学部、薬学部、保健医療学部の1年生、約600名が在寮しており、今年で47年目を迎えます。寮の数は増えてきましたが、富士吉田寮は「1年生全員が入寮しなければならない全寮制の寮であり、単に学生の住宅施設ではなく寮生活という集団生活を通して学業に励み、人格を磨き、心身を鍛錬して有為な社会人となるための教育を目的とする場である。」と定められ、何十年も同じ役割を担ってきています。

今年度から寮統括管理教育職員として寮運営委員長を務めさせていただくことになりましたが、本学の建学の精神である相手の立場に立って“真心”をつくすという意味の「至誠一貫」の基盤は富士吉田での全寮制の寮生活にあると考えています。楽しいことばかりではなく、我慢しなければならないこと、思い通りにいかないこと、様々なことがある寮生活ですが、切磋琢磨し成長していくのが人間形成をする上で非常に重要なことではないかと考えます。

富士吉田寮は学生の自治を第一に考え、学生達が主体的に考え行動することを重視していますので、教職員は全員サポートする側に徹しています。寮では寮監が生活面、健康面などの相談に直接対応していますが、すべての学生には指導担任がついていますので寮監と協力し学生のサポートをしています。さらに、各寮には寮担当教員がおり、寮監、指導担任をサポートするというしくみになっています。もちろん、学生だけでは解決できないような問題が発生した場合は、迅速に富士吉田キャンパスの教職員全員が一丸となって対応しています。わが子と同様に、良いことはたくさん褒め、悪いことは悪いと厳しい態度で接していきたいと考えています。

また、学生が生活する上で守らなければならない規則が定められていますが、最小限のことが決められているだけで、他者を思うほんの少しの優しさがあれば、寮生活は快適に過ごすことができるはずですが、大学入学前の家庭環境や、ご家庭での教育方針などが異なる学生が4人一部屋で生活するので難しいこともあります。学生達は4人で話しあうことを「家族会議」と称し、上手に生活面でのルールをつくり生活してくれています。

樹木は生長するために土壌中の栄養分を根から吸収しますが、やせた土壌では生長も遅く、根もしっかりと伸びることができません。自然環境豊かな富士北麓地域にある富士吉田キャンパスでの初年次は、まさに豊かな人間性を養うための栄養分を吸収し、何があってもたおれないよう、大地に深くしっかりと丈夫な根を張る時期であると考えています。肥料はほんの少しだけ、自ら成長する力を大事にし、学生の皆さんを応援できれば幸いです。富士吉田キャンパスでは、生涯の友人もたくさんできます。短い8カ月間の寮生活ですが、様々な体験を通し、吸収できることは貪欲に吸収し、将来まごころあふれる立派な医療人になってくれることを願っています。

広報誌名称について

全寮制を特徴とする富士吉田校舎学生寮は「白樺寮(男子寮)」「百合寮(女子寮)」の二寮からスタートしました。「赤松寮」「すみれ寮」を加えて四寮となった現在も、白樺・百合という名称は受け継がれています。この名を冠した『白樺・百合』という広報誌の名称には、過去・現在・未来の学生たちが日ごとに成長をとげて前進しつつも、常に初心を忘れず、伝統を受け継いでくれることへの願いが込められています。

病院実習



初年次体験実習

医学部 上杉由香 (青山学院高等部出身)

9月3日から20日にかけて、初年次体験実習がおこなわれました。初年次体験実習では、4学部混成の5人グループによる病院実習と福祉施設実習にくわえ、心肺蘇生法やけがの応急手当を学ぶ救命救急講習、各学部の将来を見据えた内容の学部別実習をおこないます。最終日の病院実習と福祉施設実習の報告会を通して情報を共有し、自らの理想とする医療人の姿を思い描き、チーム医療のあり方を考えることのできる、非常に有意義な実習となりました。

病院実習では、医療現場を見学し、医療に携わる様々な職種のスタッフが働く姿を見ることで、チーム医療や医療人という言葉の持つ意味を考えなおすきっかけを得ました。職種や資格に関わらず、どのスタッフからも医療に対する熱意や患者さんに対する真心、他のスタッフに対する気遣いを感じ取ることができ、医療人としての善し悪しは、職種ではなくその人自身で決まるのだと考えました。良き医療人という抽象的な表現を、自分のなかで深く掘り下げ、具体的なものにしていく決意をかためました。

福祉施設実習では、高齢者の方々と交流の場で会話が思うようにはずまないという悩みから、今まであまり意識したことなかったコミュニケーション手段についてじっくりと考える機会を得ました。一緒に歌を歌ったり体操をしたり、相手の手を握ったりしながら近くに寄り添って時間を共有し、これらもコミュニケーションの一つだと学びました。様々なコミュニケーションの形のなかから相手や場面にふさわしいものを選択することの重要性を知り、さっそく学校生活のなかで実践していこうと思います。

今回の実習を通して、私たちが一人前の医療人になるための教育に多くの方が協力してくださっていることを実感し、感謝するとともに、期待を裏切らないようしっかり勉強して立派な医療人にならなくてはと、医学を志す思いが一層強まりました。

最後になりましたが、私たちが快く受け入れ、指導して下さった病院・施設のスタッフの皆様、見学を承諾して下さった患者さん・施設利用者の皆様、そして、実習が円滑におこなえるよう常に支えて下さった昭和大学の先生方に、心からの感謝を申し上げます。



施設実習



BLS講習 (心肺蘇生法とAED)





クリスマスパーティー開催!

クリスマスパーティーを振り返って

クリスマスパーティー実行委員長 医学部 高橋和樹 (土浦第一高等学校出身)

第一講堂の一番後ろの左端。そこが私の定位置でした。そこから見えるのは観客の後ろ姿とそのあいだから垣間見えるステージ、機材を操作してくださっている業者の方。しかしそれで十分でした。イベントが進むにつれ、だんだんと熱くなっていく第一講堂。曲に合わせて色とりどりに変わる照明。ダンスの時には一緒にリズムを刻み、演劇の時にはともに笑い、イベントの時には声を張り上げる学生たち。その学生が全力で楽しんでいる姿をみるのが私の最大の幸せでした。

今回のようなイベントを開催する際に学生一人ひとりが役割を持っていると考えられます。私たち実行委員のような「企画者」やその企画を実際に進行していく「運営」、ダンスなど自らの得意分野で自己表現を行う「発表者」。しかし、最も重要なのは「観客」であると私は思います。今回のクリスマスパーティーにおいて、日程が例年と異なっていると同時に三連休にかかっていることもあり、学生の大半が帰省してしまうのではないかと頭を悩ませていました。そのため学生がクリスマスパーティーを楽しめるようにと様々な企画を考え、呼びかけに努めました。今年からの試みである、食堂でのスライドショーを使ったカウントダウンも行ってみました。企画の段階で部門長と内容について議論になったこともありました。それらの努力のおかげか、クリスマスパーティー当日はたくさんの学生が参加してくれました。そして、学生全体が観客となってその場を盛り上げることに、クリスマスパーティーにおけるイベントが完成していました。あの会場内の空気や雰囲気は学生の心の中に富士吉田キャンパスでの思い出として刻み込まれたと思います。

気づけばここ富士吉田での寮生活もあとひと月を切りました。別れの日も刻々と近づいてきています。私は6月の下旬に行った寮祭は学生の出会いの場であり、そして今回行ったクリスマスパーティーは学生の絆を深める場であると思います。ここで培った友人との絆はこの後の大学生活においてなくてはならないものになることでしょう。今回のクリスマスパーティーを行ううえでお手伝いくださった事務、ボイラー、食堂、業者の方々、そして何より昭和大学1年生の皆さんに心より感謝いたします。

点灯式

中央委員長 医学部 山下大貴 (掛川西高等学校出身)

昨年度に引き続き、イルミネーションの点灯式がクリスマスパーティーと同時に行われました。点灯式では、まずアカペラサークルが「きよしこの夜」とアカペラの定番「So much in Love」を披露し、会場はたちまちロマンティックな雰囲気に包まれました。

その後、小出教育部長がクリスマスパーティー実行委員を激励され、待ちに待ったイルミネーション点灯の時間がやってきました。イルミネーションのなかには学生が時間をかけて制作したものも多く含まれていたことから、期待半分不安半分でその時を迎えることになりました。点灯のスイッチが押され、日が沈み暗くなった富士吉田校舎全体に綺麗な明かりが灯りました。本当のクリスマスは一ヶ月以上先ですが、富士吉田校舎にはひと足早くクリスマスが到来。学生からは歓声が上がり、夜から始まるクリスマスパーティーへの期待がふくらむ点灯式となりました。



点灯スイッチを押す瞬間



アカペラによる歌披露

☆ 地域交流 ☆

寮祭・クリスマスパーティーを通じて

クリスマスパーティー実行委員 医学部 水谷哲也 (時習館高等学校出身)

僕は、クリスマスパーティ(以下クリバ)では地域交流部門長として活動させていただきました。寮祭では地域交流副部門長を務めたのですが、地域交流部門ではある程度毎年行う企画が定まっています。寮祭ではバザーを担当し、クリバでは障害福祉サービス事業所の施設の方をお招きしての販売企画と、地元の支援学校の生徒と交流を深める企画(サタデークラブ)を行います。

寮祭では、バザーに加え、富士吉田、山梨のことを皆に知らせてもらおうと抽選会を行いました。景品は地元のお土産やチケット、福祉事業所のお菓子などにしました。初企画でしたが、昭和の学生だけでなく、オープンスクールで来ていただいた方にも富士吉田を知って、楽しんでいただけたのではないかと思います。ぜひ来年度もやってほしい企画です。また模擬店に交じり、けやき園という施設をお招きし、学生と共にパンやクッキーなどを販売していただきました。

クリバでは、販売とサタデークラブの二つの企画を行いました。今年はクリバの日程が早まったため、サタデーの企画はクリバの一週間後となりました。販売では、昭和大学の初年次体験実習でお世話になった施設の幾つかを招待し、販売するだけではなく、クリバを楽しんでいただくことをコンセプトとしました。3団体の障害福祉サービス事業所をお招きし、うち2団体は、初の招待でした。それぞれの施設が手作りの商品を学生と販売し、また、クリバの各種イベントと一緒に見に行き、昼食は食堂で取ることにして、食堂の寮食を食べたり、食堂での管弦楽団の演奏を聞いたりして、楽しんでいただきました。とても楽しく充実した時間を過ごせたと仰っていただき、こちら側としても大変嬉しく思いました。来年度、僕らはこのキャンパスを去り、新一年生がここへやってきますが、これからも、昭和大学富士吉田キャンパスと地元の方々の交流が続いていくことを願っています。

寮祭やクリバの委員を務めることは、自分にとって初めてのことであり、企画から実行まで全て自分で作り上げていくことは、大変ではありましたが、とても貴重な経験を積むことができたと思っています。仕事をしていくなかで、多くの人に出会い、地域には様々な生き方、暮らしがあり、互いに支えあって暮らしているということを学びました。さらに、自分の住む地域を大切にしていきたいとの思いをも深める経験となりました。